
東方幻想鏡

みっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想鏡

【Nコード】

N1292N

【作者名】

みつちよん

【あらすじ】

魔理沙は霊夢のところへ行く約束をしていたが、用事により遅れてしまう

その頃、博麗神社では大変なことが起きていた

異変の始まり（前書き）

初めて書く作品になりまっせー

見てくれたらコメたのんます

異変の始まり

〈東方幻想鏡〉

ここは幻想郷今は深夜

「ずいぶん遅れちゃったな、今から行って大丈夫か・・・？」

普通の魔法使い、霧雨魔理沙は夜空を飛びながら呟いた

「あいつの事だからなんでこんな時間に来るのよー！とか言いそうだな、はは」

――魔理沙はこれから起こることを何も予想していなかった。

〈博麗神社〉

「おかしいな、出迎えてくると思ったのに」

いつもなら月を見ながらお茶を飲んでいるであろう霊夢が居ない

「おーい、霊夢ー。居るのかー？居るなら返事しろよー」

神社は静まりかえっており、返事も帰ってこなかった

「おかしいな・・・なんで誰も居ないんだ？」

シュッパパパ

「はっ!?!」

さっきまで居た場所には霊符が刺さっていた
それはどうみても霊夢のものだ

「おい、なんのつもりだ、霊夢・・・っ!?!」

そこには霊夢であり、霊夢で無いものが居た
目は赤く光り、瞳は虚ろなのだ

「ウケケケケケ」

「おい!どうしたんだ!霊夢!」

やはり反応は無い。それどころか今にも襲いかかってきそうだ

「来るっ・・・!」

「ハッハア!」

パシュッパシュッ

カカカツ

「ったく、やばいな、これは。逃げるぜ!」

30分後

魔理沙は霊夢らしきものを撒いて神社の一室へ逃げ込んだ。
辺りは何事もなかったように静まり返っている

「・・・どっか行っただみたいだな」

——あれは一体何なのだろうか。
あれは霊夢じゃない、なら何だ？

魔理沙は考えをめぐらそうとした、その時
ガタッ

「誰だ！」

「私よ」

そこに居たのは博麗霊夢。
楽園の素敵な巫女だった

「霊夢・・・無事だったのか」

「なんとかね」

「ところであれはなんなんだよ、霊夢」

「・・・」しかし無言で返される

「とりあえず中に入りましょう、長くなるわ」

- - - - -

異変の始まり（後書き）

ニコニコ動画で動画を見て書く話です
もう続編はつくらないそうなので書かせていただきます
ダメでしたら批判してってください

てか台本書きすぎるだろう、自分

異変の始まり(2)

お茶を煎れて、くつろぐ二人

「それで何があつたんだ？霊夢、長い話って」

「裏の蔵で古い鏡を見つけたのよ。それをあなたにあげようと思って、でもやっぱりあげるのやめようかなーなんて見てたら、あれが出てきたのよ」

霊夢の口調は軽いが表情は真剣だった

「随分と短い話だったな」

「．．．とりあえずあんなの野放しにしておく訳にはいけないですよ」

「で、お前はあいつがでたときに何をしていたんだ？お前は妖怪退治のプロだろ？」

少し俯いて

「気絶してたのよ．．．」

そう言った

「まさか．．．．．やられたのか？」

「違うわ、びっくりして転んじやつたの」

「ドジめ」

チャッ

唐突に霊夢は符を構える

「悪口言ったのは悪かったから落ち着いてくれ！」

しかし霊夢は魔理沙に怒っているようではない

霊夢の視線は後ろへ行っている

おかしいな．．．と思い魔理沙は後ろを見る

「魔理沙、構えなさい……」

後ろを見るとそこには、もうひとりの魔理沙が居た。左手には八卦炉を持っている。

「事態は思ったより深刻なようね。」

「らしいな」

鏡の魔理沙が左手で八卦炉を構え始めた

「避ける霊夢！」

パシユツ

辺りが一気に明るくなった

そしてその閃光が収まったとき、二人が居た場所は燃え尽きていた

「魔理沙！あとで直しなさいよ！」

「はっ知らないなあ！」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
一日目
完

異変の始まり(3)

二人は博麗神社から逃げ、今は人里へ居る

「さて、どうする？ 霊夢」

「そうねえ．．．あの鏡も無くなっちゃったしどうしようかしら」

二人はお茶を飲み、団子をたべ、とてもゆっくりしていた
そして霊夢がもう一本と手を伸ばしたとき、魔理沙が

「このままゆっくりなんてしてられないな．．．」

ピタッ

霊夢の手が止まり、魔理沙の頬へ手が伸びる、そしてその手で頬をつねりながら

「大丈夫よ、いつもどおり異変なんてパパッと解決してやるわ」

「はは、それは頼もしいな」

手は頬から離れ、また団子へと伸びていった、

「このままだと偽物がどんどん増えていきそうだな。」

「そうね、こちらはどうしようもないから苦しいわ」

「別れて探すか」

二人は別れ、霊夢は紅魔館へ、魔理沙は妖怪の山へ行くことにした

．．．．．霊夢

湖の上を飛んでいると、その声は聞こえてきた

「あれ？れいむだ」

チルノだ、どうやら本物らしい

「チルノ、あんた変な私見なかった？」

「へ？みてないよ。だってれいむここにいるじゃん」

「そうじゃなくてね、赤い目をしている私」

どうやらチルノは見えていないようだし、しかし、思わぬことが聞けた

「でもね、へんなまりさなら見たよ、こえかけたけどむしされちゃった」

「！？・・・それはまずいわね」

どうやら鏡の魔理沙は紅魔館へ向かっていったらしい

「チルノ、あんたは妖精たちに絶対に外に出るな。って伝えてきてくれる？」

「えーなんでー？」

「良いから早くー！！」

彼女は霊夢の気に圧されたようですぐにどこかへ行った

「私も急がなきゃ・・・っ！」

・・・その頃の紅魔館

いつものように暇を持て余していた紅美鈴
今日ものんびりとしていた

「ふあゝ．．．どうやらお客さんが来たみたいですね」

その客は白黒服に帽子をかぶり、箒を持っていた
もちろん．．．赤い目で

「また魔理沙さんですかー．．．っ！？誰だお前は！」

「．．．なぜわかる」

「それでも便利な能力を持っていますのでね

分かるんですよ、あなたが魔理沙
さんじゃないくらい！」

しかし美鈴は内心焦っていた。

この目の前に居る物が何か分からないからだ

（なんだあれは．．．

人でもない、妖怪でもない。危険な匂いがプンプンします
ね）

しかし美鈴は逃げようとしないう、それどころかあることを思い出し
て覚悟を決めたようだ

（咲夜さんは今出かけている．．．私がなんとかしなきゃ）

「ここは通しません！」

- - - - -

相手の動きが分かる

——放たれる拳、足、そして弾幕
それらは全て魔理沙と同じ動きであった

美鈴は相手が踏み込めば下がり弾幕を放たればかいくぐる。

偽魔理沙は八卦炉を取り出し

「くっ、マスタースパーク！」

しかしそれも苦も無くよける

そして美鈴の必殺の一撃が放たれようとしていた

「華符・・・彩光蓮華掌！」

ガッ・・・

「お前は3秒後に死ぬ」

・・・ぱたっ

偽魔理沙は塵となり消えていった

霊夢はそのあとすぐに来た

「おや、霊夢さん、どうかしましたか？」

「はあ・・・魔理沙は来なかった？」

どうやら美鈴が魔理沙を倒したことはないらしい

「あれなら私が倒しましたよ」

「え．．．あんたってそんなに強かったっけ？」

「失礼な！それでも一応紅魔館の門番ですから！」

「あ、そうだったっけ」

おもむろに霊夢が近づいてくる

ブスッ

「そう、なら死んでくれる？邪魔だから」

「え．．．？」

美鈴の腹には穴が空き、そこからは血が流れている

「なん．．．．で．．．」

いきなり霊夢の眼が赤くなる

「!？」

「私も偽物だった、ただそれだけよ」

偽物は微笑みながらそんなことを言う

美鈴はそれを薄れ行く意識の中聞いていた

鏡の謎

- - - - - 魔理沙

魔理沙は妖怪の山を飛んでいた

非常事態なのか、誰も邪魔しには来ない
事件が起きているのは間違いなさそうだ

妖怪を止めて聞いてみた

聞いた話によると

何やら変な奴が来て止めたにも関わらず行ってしま
ったらしい

魔理沙はこれは大当たりだな！という風に

「偽物の私が偽霊夢のどちらかってことだな！」

と言った

その瞬間

「ボオオン！」という音が聞こえ、魔理沙はそっちを向く

なんと山の一部が禿げて地面がむき出しになっているではないか

——これは急いだ方が良さそうだな

急ぎその場所へ行く魔理沙、そこでは――

河童の河城にとりと天狗の射命丸文が戦っていた

「なんで文さんは山のみんなを襲ったツスカ!？」

「私はなにもしてません！」

「嘘を言っな！」

どうやら二人は誤解しあっているようで、もう戦闘には入っていた

魔理沙は二人の弾幕を掻い潜り叫ぶ

「おい、二人共、落ち着け！」

「これが落ち着いてられるものツスカ! 雛がやられたっていうのに
！」

「だからそれは私じゃないですって!」

「だーっ! 落ち着けえええ」

魔理沙は二人を叩き、座らせた

説明をしているようだ

「・・・という訳なんだよ」

「なるほど、それは本当のことなんですね。」

「そうですか・・・私が悪かったツス、文さん」

「これはしょうがないですよ」

二人の誤解は解けたようだ
しかし、また問題がひとつ・・・

「二人共、影はどうしたんツスか？」

魔理沙と文は下を見る
なぜか影がない

魔理沙はわたわたししている
そこで文が

「こんな話聞いたことありますね」

——昔、ある鏡があり、その鏡に写ると命が吸われると言われ、
誰も近づこうとはしなかった
だがそんな話が忘れられた頃、その鏡が王様へ献上された。
やはりその鏡に写った王様はある時いきなりおかしくなり、最終的
には一国が滅びたらしい——

そしてそのまま忘れ去られ、幻想郷へ来たようだ

「それじゃあ尚更急がなきゃじゃねーか！」

「ええ、急ぎましょうか」

「私も手伝うツス！」

しかし、その次の瞬間に魔理沙に影が戻る

「・・・私の偽物に何かあったのか？」

「影が戻ったんだからいいじゃないッスか」
「じゃあ早いところ霊夢に合流するぜ」

「．．．あのー私の影は？」

「忘れてた」「忘れてたッス」

－ － － － － － －

美鈴が先程のことを喋っている

「〜ということがあったんですよ」

「まさかどっちの偽物も同じ場所に來てたとはね．．．魔理沙は骨
折り損じゃない」

あの後すぐに本物の霊夢が來て美鈴を死の淵から救ってくれた
だが美鈴はすぐに動けるような状況でもない

「私は中に行くてくるから、あなたはここで待ってて」
「そんな、私も行きますよ．．．」

美鈴は傷付いた体を起こそうとしている

「ダメよ、そのケガじゃ！」

「今館には咲夜さんが居ないんです！私が守らなきゃ誰が守るって
言っんですか！」

「・・・」霊夢はちよつと考えたあとこつ言った

「絶対に無理しちゃダメよ」

「・・・はい！」

鏡の謎(2)(前書き)

サブタイトルが一番悩む件について

鏡の謎(2)

霊夢と美鈴は紅魔館の中に居た
中は静まりかえっており、所々には妖精の物と思われる血痕が飛んでいる

「・・・これはひどいわね」
「・・・・・・・・」

美鈴は何も言わずに歩いている。
しかし肩が震えているところを見ると相当怒っているようだ

霊夢はこれは話さない方がいいわね。 と思いこれ以上は何も話さなかった

しかしその沈黙を破る音がひとつ

ズン・・・パラパラ
良く聞くと上の方から音が聞こえる

「私はパチュリー様のところへ行きます・・・霊夢さんは上へ行つてください」

「分かったわ、先に脱出しててくれる？」

コクン、美鈴はうなずき図書館の方へ駆けていった

ひとりになった霊夢

「なんだか力が出ないわね・・・」

- - - - -

「これは何が起きたのかしら」

十六夜咲夜、紅魔館のメイドである
彼女は紅魔館の変貌ぶりに驚いていた

門は破壊され、中に入ると血痕が多数飛んでるのだ
これはただことではない

「お嬢様達はどこへ行ったのかしらね」
と呟いた

- - - - -

レミリアと偽霊夢は戦っていた

レミリア・スカーレットはとても楽しそうだ
本人にはそうではなくても、霊夢にはそう見える

「ほらほら！もっと来てみなさいよ！」

「くっ、夢符 封魔陣！」

霊夢は見ていることしか出来なかった、今の体で行ってはやられる
のは目にみえている

「あらやるわね、じゃあこれでどう？」
「来てみなさいよ」

どうやら二人共スペカを発動するようだ

「必殺 ハートブレイク！」

偽霊夢は防御をする

「夢境 二重大結界！」

巻き起こった粉塵が視界を遮る

その粉塵が晴れたときにもまだ勝負は終わっていない
だが、偽霊夢は傷ついていた

- - - - -

大図書館へきた美鈴

そこにはメイド達とパチュリー・ノーレッジが居た

「みんなここへ避難していたんですね・・・良かった」

「ええ、一部ひどいケガもいるけど大体無事よ」

とその時、戦いの音が消えた

「・・・勝ったんでしょうかね」

メイド達もざわめいている

「何を言ってるの？レミィが負ける訳ないでしょう」

「ですよね」

- - - - -

「はは．．．やるじゃないの。あなた本物より強いんじゃない？」
「くっ．．．．」

「これで終わりよ！神鎗 スピア・ザ・グングニル！」

この時にはレミリアは勝利を確信した

「甘いわね．．．霊符 夢想封印」

二つのスペルカードがぶつかり合った
カッ！ひどい光と音だ

やっと眩んだ目が治ってきた

最初に見えたものは．．．ボロ雑巾のように転がっているレミリア
だった

力の落ちた霊夢には何が起きたか分からなかった

ただひとつ分かること、それはレミリアが負けたことだ

「あなたが動けないならここにはもう用は無いわ、じゃあね」

偽霊夢は去っていった

ボロボロになったレミリアを置いて

- - - - -

目が覚めたときにはベッドの上だった

隣では咲夜とパチュリーが椅子に座っている

咲夜はレミリアが起きたことに気づいた

「お嬢様！大丈夫でしたか！？」

「・・・大丈夫じゃないわ」

「レミィが負けるなんてめずらしいわね」

「あの偽物が霊夢の本気つてところね、ところで本物の霊夢は？」

どうやら霊夢がいた事には気づいていたらしい

「彼女ならもう行ってしまいましたよ」

「・・・そう」

「伝えたいことでもあったの？」

レミリアはNOと答えた

ただ心配だったのだ、あれに勝てるのか。と

異変の終わり（前書き）

そろそろクライマックスだ！と思う

異変の終わり

魔理沙達はひとまず霊夢と合流しようとしていた

どうやら偽文はもう妖怪の山には用はないらしくどこへ行ったのかも分からない

「どこ行っただろうな、鏡は」

魔理沙は呟いた

それに文が答える

「いま私が幻想郷中の情報を集めていますが。鏡は自分だけでも動けるようですね」

「じゃあ早いところ見つけないと大変だな」

「ええ、しかも並の妖怪達じゃ手も足も出ないですからね」

にとりはアイテムを取りに行くと言ってどこかへ行ってしまった

そこで魔理沙が

「多分魔法の森に居ると思うぜ」

「どうしてですか？」

「勘だよ」

「いつもどおりですね」

「だな」

二人は魔法の森へ行った

「ほーら、大当たり」

「まさか本当に居るとは・・・」

魔法の森に鏡は居た

人になった鏡は左手に鏡のような盾を持ち、右手には煌く刃を持っていた

「なんか・・・強そうですね」

特に焦った様子もなく魔理沙は攻撃をしかける

「先手必勝だ！マジックミサイル！」

しかし鏡の盾によって跳ね返される

魔理沙は避け、文はいつのまにか消えていた

「っ・・・まじかよ」

鏡はそんなの当たらないな。という風に盾を構えている
しかし

ピュッ！

という音がして鏡は倒れた

鏡の後ろに文が居る、どうやら攻撃をしたようだ
要は不意打ちである

「案外弱かったですねー」

「まあ．．．ずっと鏡の中に居て経験も何もなかったからな」
「起き上がらないうちに割っちゃいましょうよ」

返事を言わぬまま

魔理沙は箒を振り下ろした

ガッツ！

しかし鏡は割れない

霊夢が箒を止めていた

「霊夢、何で止めるんだ？そしてどうしてここが分かった。」

「勘よ、あとそれは封印させてもらうわ」

霊夢曰く、封印しないとまた他の鏡にとりついてしまうらしい

「そいつは危なかったな」

「今週の記事は鏡が一面に出そうですね」

「ほら喋ってないで行くわよ、博麗神社へ」

．．．．．

異変の終わり(2) (前書き)

ということでクライマックスですな。
鏡は無事に封印できるのか!?

それは見てのお楽しみです・・・

楽しみにしてる人居るかは知らんが

異変の終わり（2）

博麗神社にはレミリアと咲夜、それに早苗が居た

レミリアは

「私たちが居ないと封印が出来ないでしょ？ 邪魔も入りそうだし」

と言った

早苗は

「私は封印を手伝いますよ、霊夢さん」

「助かるわ、いま私の力は落ちてるし」

という訳らしい

「じゃあ・・・封印を始めるわよ。あなた達は私の偽物を止めておいて」

.....

「来た」

虚空から偽霊夢が猛烈な勢いで近づいてくる

「封印は・・・サセナイワ」

「はっ、邪魔ができるなら・・・」

「『『してみなさい!』『』」

そして戦いの火蓋が落とされた

- - - - -

レミリアと咲夜はうまく連携をしていた

レミリアが弾幕を放ち、咲夜が時間を止めて相手の動きを制限する
というものだ

魔理沙は持ち前の素早さで敵を翻弄していた

．．．偽霊夢は痼癢を起こしたのか大きなスペカを放とうとしている

とその時、霊夢の封印が終わったようだ

「みんな、封印は終わったわよ!」

「ウ．．．ガガガ」

偽霊夢の様子がおかしい、あの異様な回復力が無くなっているのだ

「今がチャンスだぜ!」

「ええ。スピア・ザ・グングニル!」「マスタースパーク!」

槍と閃光は霊夢を貫き、消えていった
そう、勝ったのだ。この大きな異変に

と、その時どこかに居た偽文が魔理沙を狙いスペカを放った

「魔理沙、危ない！」

「霊夢!?!」

そのスペカは魔理沙ではなく、霊夢を貫いた

-
-
-
-
-
-
-

異変その後（前書き）

文の攻撃に倒れた霊夢。
どうなってしまうのか！

最終話でございます

異変その後

「ちくしょう！マスタアアスパアアク！」

怒りの一撃が放たれる

偽文は光に飲まれて消えてしまった

「おい、霊夢、大丈夫か霊夢！」

しかし返事は無い

「おい、永琳のところへ行くぞ！」

- - - - -

「・・・霊夢は生きてるのか・・・？」

「結論だけ言っと生きてるわ、でも目が覚めないだけよ」

「目は・・・覚ませられるんですか？」

霊夢はこの騒ぎの中微動だにしない

そしてとりあえず絶対安静ということで博麗神社へ返されることになった

- - - - -

「・・・今日も霊夢は目を覚まさないのね」

「ああ・・・いつ覚ますんだろうな」

あれから2週間が経っていた

鏡に力を吸い取られていた上であんなのだろつ。と魔理沙は予測していた

「私は帰るわね。」

「ああ、気をつけてな」

レミリアと咲夜は帰っていった

「なあ霊夢、お前はいつ目を覚ますんだ・・・？」

「・・・。」

「お前がいつ目を覚ますのかってみんなここに来るんだぜ・・・。」

「・・・。」

「私だって・・・寂しいんだからな。うう・・・。」

魔理沙は泣き始めてしまった。誰も見てないと思って

「・・・ぷっ」

「!？」

「ははは、あなたでこんなことで泣いてるのよ」

「なっ、霊夢！お前起きてたのか！」

霊夢はとても元気そうにしていた

「ええ、結構前にね。それにしてもめずらしいもの見れたわー。魔理沙の泣き顔だなんて」

魔理沙は顔を真赤にしている

「・・・うう。バカ霊夢！」

「あははは」

そして霊夢は魔理沙を抱きしめる

「ありがとうね、心配してくれて」

「ほんとお前が死んじゃったらどうしよう・・・って思ってたんだぞ」

「私は死なないわよ、こんなんじゃないね」

霊夢はそつと魔理沙に耳打ちした

「こんなことじゃあなたより先に死ねないわね」

「いや、私のほうが長生きしてみせるぜ」

.....

その翌日。博麗神社では宴会が繰り広げられていた

「霊夢ー死んだかと思ったぞー」

「だからあんなんじゃないってば」

みんな好き好きに彼女に絡んでは酒を呑む。その繰り返しかった

そして宴会の終わる頃霊夢が

「えーみなさん。本日はお集まりありがとうございます

す。かんぱーい！」
それではこの宴会を終わりに。二次会を始めま

「「「「「かんぱーい！」「」「」「」

「終」

異変その後（後書き）

はい、終わりです。

なんかg d g dな終わりですまんこった

ま、そのうち別のは書きますが・・・

とりあえず感想がほしかったZ E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1292n/>

東方幻想鏡

2010年10月10日14時11分発行